

大阪天満宮社報

第58号

てんまつんじん



遷宮で結ぶ人の輪心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

旧儀復興「梅の瑞枝」	2 頁
神鉦講 結成八十年	4 頁
夏祭りのごちそう	6 頁
西山宗因の人柄	10 頁
三つの慶事	11 頁
天の川伝説	16 頁

涼風進上
平成二十二年 盛夏

表紙解説

生田花朝

「天神祭」

昭和初期 絹本着色
四九・二×五七・二cm

大正・昭和期の大阪画壇を代表する女流画家、生田花朝（いくた かちよう・一八八九―一九七八）が天神祭の船渡御を描いた作品です。

中央に、御神霊を奉戴する「鳳神輿奉安船」を描き、その周りに様々な供奉船や献茶船、それを儀装する無数の幟・提灯・吹流しなどを配して、船渡御の賑々しく華やかな様子を表しています。

浪速の風俗を生き生きと描き続けた花朝は、当初から実力を認められた訳ではなく、帝展（現在の日展）に落選の年月を過ごしています。しかし、大正一四年（一九二五）に初入選すると、その翌年には『浪花天神祭』が特選に選ばれています。現在、この特選作は行方不明となっていますが、花朝はその後も天神祭を題材とした作品を数多く残しています。当宮にも五指に余る作品が伝えられますが、そのうちの右下図は、天満天神繁昌亭の緞帳に採られたこ



とも知られています。

昭和四九年の当宮「社報」に掲載のインタビュー記事では、次のように語っています。

「私の今日があるのは天神さまのおかげです。『浪花天神祭』が特選になり仕事に励みがつきました。祭りはなんというても大阪の夏祭。中でも天神祭が一番ですなあ。今まで十点ばかり天神祭を描きましたが、生きている間にもう一点、船渡御を描いて残したい…これが私の念願ですのや」

表紙の絵は、今年の天神祭・公式ポスターに採用されましたので、町角や駅などでお目に触れるかもしれません。

旧儀復興

綱敷天神社から

「梅の瑞枝」

今年の「天神祭神霊移御祭」において、一四〇年ぶりの古儀を復活いたします。

前号の社報でご紹介しました通り、当宮の「神霊移御祭」に御料となる「梅の瑞枝」は、古くは、綱敷天神社の「梅塚」から採られていました。綱敷天神社の御旅所は、元は太融寺町の「梅塚」にあったのですが、明治五年に「才田」に移され、その翌年には現在の茶屋町に移り、現在に至っています。

「才田」とは、文化一〇年（一八一三）ころに「梅ヶ枝新地」と呼ばれた地で、のちに「梅ヶ枝町北」と名付けられました。御旅所が「梅塚」から「才田」に移されたところから、当宮への「梅の瑞枝」の授与は中断したものとも推測されます。ちょうど幕末・維新期の動乱により船渡御が中断されていた時代にあたります。今年の七月二四日には、鉾流神事を終えた後、神童と神職数名が車両で綱敷天神社の御旅所へ参向、同この由を奉告する祭儀を行い、当宮神職が奉幣の儀を行ってから、古例に従って青竹の中に水をはった中に瑞枝を納めて、当宮本殿まで持ち帰り、翌日の「神霊移御祭」に備えます。



鳳神輿・獅子舞

北新地巡行



「鳳神輿」の巡行（昨年）



「天神講獅子」の巡行（昨年）

そこで、往時の陸渡御を知る方々や、それを聞き伝えられた方々から、お渡りの復興を願う声が寄せられ、堂島地域や北新地社交料飲協会のご

来る七月二三日（金夜、北新地上通り・本通りにおいて、鳳講・天神講獅子による「北新地巡行」が催行されます。

北新地への陸渡御巡行は、昭和三六年を最後に途絶えてしまい、堂島地域と当宮や天神祭との関わりが希薄になる傾向がありました。

復興二年目の巡行が、昨年よりまして、より盛大な巡行となりますよう、御協力の程お願い申し上げます。

協力を得て、昨年七月二三日、半世紀ぶりに復活したものです（その経緯については「社報」第五六号を参照ください）。

久々の巡行を迎えられた地元の故老は「懐かしい音やなあ、やつぱり祭りにはええもんですなあ」と感激されていました。今年もきつと心待ちにされていることでしょう。

午後八時一五分、船大工通り沿いのANAKラウンプラザホテル西側から行列が発します。鳳講・天神講獅子の高張り提灯を先頭に、獅子頭・傘踊り・四ッ竹、それに北新地クイーンを含む社交料飲協会会員、加えて鳳講子供神輿など、総勢二〇〇名余の行列が上通り・本通りを賑やかに巡行致します。

フレーム切手

「天神祭」

恒例となりました「天神祭」のフレーム切手が今年も発売されました（八〇円切手一〇枚シート）。平成一九

年以来、毎年、異なった図柄で楽しんで頂いていますが、今年は、明治・大正期の画家による天神祭の絵一〇枚で構成しました。



切手と写真図柄を郵便物に貼って、ご利用いただけます。写真図柄だけでは、切手としてご利用いただけません。郵便物に貼付のためにこの切手をご利用の場合、写真図柄に消印があることがあります。

『西天満連合神鉾講のあゆみ』 結成八十年の記念出版



新調された「御鉾」

天満連合神鉾講議長 野村祐三

この度、西天満連合神鉾講八十年の節目の年を迎えるにあたり、一昨年には神鉾台の御修理と、鉾流歌録音盤CDの製作奉納をさせて頂き、天神祭関係講社と講員の皆様には大変お世話に相成り、また御丁寧なる御祝意を賜り、誠にありがとうございます。

続いて、本年の八十周年に向けてこれまでの講の歩みを振り返り、今日に至りますまでの事跡を『西天満

連合神鉾講のあゆみ』としてまとめさせて頂きました。

昭和五年七月二十三日、明治時代につくられた「鉾流講」を再興し、講名を「神鉾講」と改めて以来、戦争や大阪の地盤変化など様々な困難を乗り越えて八十年を迎えることができましたのは、偏に天神様のお蔭、歴代講長はじめ先人講員の皆様のお蔭、大阪天満宮関係者各位のお蔭であると心から感謝いたしております。

以下に、このたび発刊しました『神鉾講のあゆみ』の目次を掲げておきます。(笑覧賜れば幸甚に存じます。

《第一編 講史》

一、神鉾講前史

- 1、大阪天満宮の創祀
- 2、鉾流神事・天神祭の始まり
- 3、祭日の変更
- 4、御旅所の常設と鉾流神事の中止
- 5、天神祭の発展と講の結成

《第三編 資料》

- 各論1 鉾について
- 各論2 鉾流歌の復曲
- 各論3 移御祭の瑞枝と梅ヶ枝町
- 各論4 「鉾台」の修理と神宝「御鉾」の奉納。

- 二、鉾流神事の復興と神鉾講の成立
- 1、幻の鉾流神事再興と鉾流講の結成
- 2、天神祭座談会における提案
- 3、神鉾講の結成と鉾流神事の復旧
- 4、神鉾講の御奉仕

《第二編 各論》



去る七月一日、神鉾講結成八十年の諸事業完了の記念として、御本殿の神宝となる「御鉾」を奉納されました。

常日ごろは、御内陣の御神座近くに奉安されますが、渡御の際には御祭神が出御の後、本殿からお出し申し上げ、神鉾講にお預けとなり、陸渡御の先頭に捧持されます。もちろん船渡御にも捧持されて、神鉾講の

菅原道真公千百年を記念して、平成一二年(二〇〇〇)に始まった「御迎人形」のレプリカ複製も、今年の「雀踊」で一体目となりました。

今年の御迎人形レプリカは「雀踊」

現在、授与所にご用意していますのは、「羽柴秀吉」「八幡太郎義家」「狸々」「酒田公時」「三番叟」「鬼若丸」「阿倍保名」「木津勘助」「関羽」「鎮西八郎」の一〇体です。

「雀踊」とは、風流踊りの一種です。武家に仕えた奴(やつこ)姿の編み笠をかぶり、「竹に雀」の模様の着物一のユーモラスな人形です。ちなみに、「雀踊」は、現在でも堺や仙台南など、日本各地の祭礼に伝わり、和歌山県御坊市の「雀踊」は、県の無形民俗文化財に指定されています。

本年の天神祭には、参集殿西縁側

宮入りの際、本殿へお納めする慣例となります。

この鉾の形状は長さ七尺余という通常の御神宝の寸法ですが、鉾先や鰭は台鉾の形状を写したもので、いわば台鉾の「形代(かたしろ)」という意味合いがあります。

「御鉾」奉納の後、天満宮会館において「神鉾講八十周年祝賀会」が開かれました。

に本物の「雀踊」も飾りますので、ぜひお楽しみください。その豪華な「竹に雀」の刺繍は見ものです。



医師・湯川玄洋のみた 夏祭りのごちそう

明治39年7月 大阪朝日新聞掲載
「大阪の飲食物 祭礼の食物」より

関西大学大学院 文学研究科博士課程 和住香織

大阪の夏祭りは六月三十日の愛染祭に始まり、八月一日の住吉祭で終わる、と言われている。七月は大阪では祭り月である。この一カ月間、大阪のどこかの神社で祭りが行なわれている。

一九〇六年（明治三十九）七月、二十五日の天神祭を目前に控えた十日から十三日にかけて、『大阪朝日新聞』に「大阪の飲食物 祭礼の食物」という談話記事が掲載された。これを談じたのは、消化器の専門医であり、一九〇四年に大阪今橋で初めて胃腸病院を開業した湯川玄洋（一八六五～一九三五）であった。湯川玄洋は、旧和歌山藩士である坂部家に生まれた。一八八三年（明治十六）和歌山県立師範学校を卒業後、日高郡比井浦の比井小学校へ赴任した。比井浦の医家である湯川家に見込まれ養子となり、家業を継ぎ、御坊で医院を開いた。その後ドイツへ留学し、帰国後大阪で開業したのである。物理学者の湯川秀樹は玄洋の娘婿である。

ある日、玄洋が古老の家を訪ねたとき、大阪の祭礼の食物の話になった。古老の話によると、祭礼で用いる食品は次のようなものであった。

- ▲焼物 鰯又は鯉
- ▲鮓 鯖のすし
- ▲混物 白瓜に鯉の皮
- ▲飯 赤飯（即ち小豆飯）
- ▲索麵 冷やし又は煮麵（午後三、四時に用いる）
- ▲天麩羅 （まびき菜と共に煮る）
- ▲酢の物 蛸

この話を聞いて、玄洋は「此の食品を見るに能くもかう不消化物を揃へたものだ」との思いに至った。不消化づくめである、と話したら、そばに居合わせた滑稽家が「大方病人が沢山出来る様に昔のお医者様が献立をお作りに成たのでせう」と言っ

て笑ったそうである。それでは、これらの食品は本当に不消化づくめなのであるうか。さらに玄洋は、これらの食品について注点を述べている。それぞれ次のとおりである。

▲焼物 消化の良さに関して言えば、一番の調理法は刺身、次に煮物、その次に焼物。一番消化の悪いのは、味噌漬けである。また、鯉は骨切り焼は何故だか腐敗し易く、腐敗しても判りにくい、という。

▲鮓 すしは、水を少なめに炊くので飯の中の水分が少なく、消化しにくい。鯖を酢に浸すことは、魚の蛋白質分を酸により凝固させることなので、物質の硬度が増す。鯖のすしはこれらをいっぺんに食するのであるから、咀嚼がぞんざいになる。また、めずらしいからどうしても多食になる。これらの悪条件が重なり、胃腸に負担がかかる。祭礼のときの鯖のすしは午後三、四時頃に食するというので、これは間食である。

▲混物 皮の調法なのは、金柑だけかと思いきや鯉の皮とは驚きである。これは言うまでもなく不消化物であり、「医者の教へに背かねばならぬほどの美味でもあるまい」と玄洋は述べている。

▲飯 赤飯とただの飯では、同量であれば消化時間も同一である。ただしこれは健康な胃の持ち主にあてはまることで、胃病の人までが同じように考えてはいけない。

▲索麵 「そうめんは消化が悪い」とよく言われていることだが、消化時間は米飯と消化時間が同じであり、同じ種類の蕎麦やうどんに比べても消化がしやすいのである。食べるときに十分に咀嚼をしないから「消化が悪い」のである。

▲天麩羅 天ぷらほど消化の悪いものはない。例えば、海老の照り焼きと天ぷらでは、天ぷらのほうが消化が三十分遅い。よって、天ぷらのように油で揚げたものは消化が悪いのである。祭礼で用いられるのはアンペラの油揚げである。大阪の古い家では祭礼のときにこれを奉公人に食べさせるのとことであるが、これでは祭礼も奉公人にとっては厄日であると皮肉を言っている。

▲酢の物 蛸が不消化物であることは、「小供でも知つて居ることだから説明するまでもない」と玄洋はにべもない。

このように見てくると、まるで湯川玄洋は祭礼の食物について「あれもだめ、これもだめ」と堅いことばかりを言っているようだが、そうではない。



鯉の皮のあえもの



白天とまびき菜 鯉のつけ焼

の雑煮に始まり、春の花見や灌仏会の甘茶、秋には九月の月見団子、そして十二月の忘年会まで、一年を通じて人びとの胃が健康上からみてどのような状況におかれているかを記している。

の結果から日本の風土・気候・習慣、更には日常の食事を考え、『胃腸之一年』を出版したのだという。

玄洋は『胃腸之一年』を次のように締めくくっている。

新玉の年の始の雑煮餅から筆を起して極月の今日が日まで叱言の百曼陀羅を列べて、ヤレどの食品は不良い、ソレこの飲料は不消化だと随分種々の熱を吹いて読者諸君の感情を害ひましたでせうが、然しそれは健康の人に向つてその不良のものを全然廃止なさいと強ゆる理由ではなく、健全の胃腑を持つてゐる人であるならば、ナア二適には不消化物を食べ

るもよろしい、講述者の説いた要はたゞ医学上の見地に立つてその道理を説明し一般の智識に衛生の注意を喚び起したまでのことで、例へば腹

工合の悪いときには不消化物を避け胃病を患つてゐる時はその病に抵触する食品を採らないやうとの趣意に外ならないのです。結局は中庸宜しきを得ることで不消化物であるから如何に健康な人でも決して食べてはならぬ、不良の飲料であるから断じて飲用を許さぬというやうな野暮なことをいふのではありません。

「大阪の飲食物 祭礼の食物」では、消化にこだわった書き方に終始

していたが、『胃腸之一年』では医学知識の乏しい者にもなじみやすいように、年中行事において饗される食べものを通して、胃腸病予防の普及につとめた。『胃腸之一年』は版を重ね、一九二一年（大正十）には『改版増補 胃腸之一年』として第四版が出版された。一九二四年にはさらに内容を充実させて『食養春秋』として出版した。

大阪の夏祭りの飲食物が不消化物だらけだったとしても、玄洋はそのすべてを否定するのではなく、一年を通じて人びとがどのような食事をしていたのかを医者の眼で観察した。胃腸病から、その背景にある生活習慣をみたのである。それは当時の大阪の食文化を映し出すものであった。

筆者和住香織（わずみかおり）さんは、平成二十一年十一月に関西大学にわ・大阪文化遺産学研究センターから発行された大谷渡教授編『大阪の神社関係記事 明治三九～四一年 「大阪朝日新聞」 「大阪毎日新聞」』の校訂を担当されました。本稿は、その編集作業過程で見えた記事をもとにして書かれたものです。

『胃腸之一年』には、一月の元旦

当時の胃腸病研究は西洋人を標準としており、必ずしも日本人に即したものではありません。玄洋は、「日本食を主位とし、標準を日本人に定めて学術的に消化試験をなし」、そ

は、消化にこだわった書き方に終始

は、消化にこだわった書き方に終始

第七回
壬子年神梅まつり

「天神縁起屏風」を初展示



「大盆梅展―天神さんと梅」の会場では、例年の通り、樹齢二〇〇年を越える銘木を含む五〇鉢以上の盆梅を並べましたが、今年もその見事な枝振りに、思わずケータイを取り出して撮影される方も多く見られました。また今年は初めて、当宮所蔵の「天神縁起屏風」を展示しましたところ、多くの参拝者の注目を集めました。天神様の御生涯から、薨去後の天変地異、さらには天神信仰の成立までの各場面が、六曲一双の画面一杯に時系列に配されており、その迫力に驚かれた方も多かったです。

そのなかには、従来の天神縁起には記されていない珍しい場面（達磨大師を描いた掛け軸など）も含まれ、今後の研究が俟たれる屏風です。

二月八日、二八日の三週間にわたって、恒例の「てんま天神梅まつり」を開催致しました。
去る平成一六年以来、今年で第七回を数えますが、梅香を楽しむに参拝されます皆様のお陰で、今年も無事に終えることができました。

次にご覧頂くときには、個々の場面の詳しい解説付きでご披露したいと思います。

大阪天満宮献詠 風月社 平成二十二年上半期秀歌

常のごと歩き得る身にならばやと
ひたすら祈り今日も過ぐしつ

顧問 關 俊一

ゆくりなく夫婦となりし孫娘

睦み和めと家祖に祈りぬ

選者 浅井與四郎

出で征きし兄の無事なる歸りをと

日ごと祈りし亡母の尊し

大阪 西脇 か津

寅年の寒さもなこみ天満宮

ふふみそめたる白梅のはな

幹事 森本美也子

名僧の寅の一字に新らしき

年を壽ぎ心引き縮む

大阪 大北 滋保

とけいたす雪間にもゆる若草の

みつみつしさの春生るみゆ

幹事 佐野 秀子

しぐるるも名残りの櫻惜しみつつ

心うららか米壽ことほぐ

西宮 牛田眞理子

街路樹の名はマロニエときかされて
思ひ出なつかしパリの旅の日

吹田 岩城 富子

たんぼぼも蝶も小鳥も友として

幼駆け行く若草の中

神戸 鈴木 敬子

還暦を迎へし妻と厄拂ひ

五黄の寅に無事安泰を

豊中 西岡 克啓

床の間に飾る張子の虎なれど

小突けば嫌々首横に振る

大阪 松村龍太郎

掌をあはせ無心に祈り捧げゐる

幼なの姿に心洗はる

東大阪 宝蔵寺京子

道の端に密かに咲ける草花も

氷雨に濡れて春を迎ふる

大阪 中瀬 央子

幼き日母と歩みしふるさとの

路の立ち木も茂りあふなり

橿原 柳野 等

第三回

あの人もこの人も

南森町二丁目 篠木豊さん

今回ご紹介する篠木豊さんは、島根県松江市のご出身です。二三歳ころに天満の地に移って義理のお父様の会社にお勤めになり、様々な経験を重ねてくれました。

篠木さんは、その跡を継いで福梅講の講員となり、歴代講元の指導の



もとで、約四〇年間、ご奉仕くださっています。天神祭だけではなく、折々の当宮の行事やボーイスカウト、さらには梅香会の幹事など、そのご奉仕は多岐に

浪速菅廟吟社詠草

雪稜 松村曉二撰

一月課題 「年頭偶成」

幹邦 西岡 克啓

歳朝翁嫗浴初陽 祈禱天神見瑞光
康健笑聲招壽福 庚寅門戸五雲長
（訓読）歳朝翁嫗初陽に浴し、天神に祈禱して瑞光を見る。康健の笑声、壽福を招き、庚寅の門戸、五雲長し。
〔語釈〕歳朝Ⅱ年の初め。翁嫗Ⅱ爺と婆。ここでは吟社の人々。

（詩意）年の初め、吟社の人々と初日に浴しながら天満宮に参拝し目出度い光を見ました。健康な笑いは壽福を招くようで、庚寅の年の門戸は目出度い雲がたなびいていた。

二月課題 梅園散策

玄齋 佐村 昌哉

園庭梅朶影横斜 點點含香三兩花
鶯告年年芳信事 佳人麗色向人誇
（訓読）園庭の梅朶 影横斜、点々香を含む三兩花。鶯は年々芳信の事を告げ、佳人 麗色 人に向って誇る。
〔語釈〕横斜Ⅱ斜めに伸びた枝。芳信Ⅱ良い便り。佳人・麗色Ⅱ梅の花。

（詩意）天満宮の庭の梅の枝は香りを含んで二三花を開かした。鶯は毎年春が来たと告げ、美女に譬えられた梅の花は誇らしげに咲いている。

三月席題 驟暖微雨

豐陽 荒木 英一

微雨蕭蕭春動時 初鶯來在兩三枝
東君最愛詩人屋 驟暖搖簾細細吹
（訓読）微雨蕭蕭として春動く時、初鶯来りて兩三枝に在り。東君最も愛す詩人の屋、驟暖簾を揺るがし細細として吹く。
〔語釈〕蕭蕭Ⅱ細かく雨の降る様。東君Ⅱ春を司る神。驟暖Ⅱ急に暖かくなること。

（詩意）微かな雨が降って春が動き始めた。初鶯は二三の枝に来て飛び移ったりしている。春の神様は最も詩人の家を愛されているのか、神は急な温かさを簾を揺るがして、風を送って下さった。

四月課題 花時出游

玖城 淺野 良治

追風蝶翅掠芳草 臨水櫻花照細漣
狗子頻催空搖尾 主人恍惚暫忘前
（訓読）風を追ふ蝶翅は芳草を掠め、水に臨む桜花は細漣を照らす。狗子は頻りに催して空しく尾を揺らすも、主人恍惚として暫くすむを忘る。
〔語釈〕蝶翅Ⅱ蝶。狗子Ⅱ犬。前Ⅱ前に進むこと。

（詩意）春風に蝶は芳しき草を掠めて飛び廻っているし、水辺の桜花はさざ波を照らしているようだ。犬はしきりに歩こうと促し尾っぽを振るけれど、主人は花の美しさに見とれて前に進もうともしないのである。

天満天神勉強会

昨年一〇月から本年五月にかけて、講社の若手を対象とした「天満天神勉強会」が開催されました。鳳講の宮本善樹さんと、天神講獅子の井藤雅之さんが発起人となり、約四〇名の受講生が梅香学院におい

て、「菅公の御生涯」「天神信仰の成立」「大阪天満宮の創祀」「天神祭の歴史」などの一四講義を七日間にわたって受講されました（講義内容は、前号を参照下さい）。講師としては、松浦清（大阪工大）、鈴木幸人（北海道大）、中嶋節子（京都大）、竹居明男（同志社大）、網干毅（関学大）、橋爪節也（大阪大）という斯界の権威をお招きしましたが、受講生からは、「学問の神様」ならではの企画だとお褒めの言葉をいただきました。



また、本勉強会は、天神祭のボランティアアガイド「天満天神御伽衆」を養成する第四期「御伽塾」を兼ねて開催され、受講生のうち五名が御伽衆候補生として選ばれました。

「しじみの藤棚」天満天神御伽衆が大補修

江戸時代の大阪町人は、正遷宮などの祝祭に、「造り物」を飾って祝意を表しました。日常品の風合いを、何か別物に見立てて、造形するのです。当宮の正遷宮には、大川北岸、天神橋から東には蜷（しじみ）の貝殻で作った「藤棚」を、西には紙で作った「牡丹の花壇」を奉納する慣わしでした。この二つは、当宮に奉納された数ある造り物の中でも、最も評判の高いものでした。



平成一四年の「菅原道真公千百年大祭」を記念して、天満天神御伽衆は、七十五年振りに、しじみの藤棚を再現しましたが、これ以降も、毎年の天神祭のたびに、参集殿西縁側に「御迎人形」とともにご披露してきました。

四月には、大阪市漁業協同組合此花支部代表の曾我部様のご厚意により、約三〇〇個ものしじみをご提供いただきましたので、早速、神職や御伽衆が、しじみを釜茹でにして、身を取り除きました（残念ながら貝毒のため賞味は叶いませんでした）。後日、御伽衆により、①しじみの蝶番部を接着剤で補強し、②貝を大きき順に並べ（逆円錐形の房を作るため）、③翠の糸に貼り付ける、という作業を行い、美しいしじみの藤棚が復活しました。大川のしじみは、店頭に並ぶ輸入物に比べて、大型で、しかも貝の内側が非常に美しい濃い紫色をしています。江戸時代に捕れたしじみも、このように大きく紫の強いものだったのでしょうか。大坂町人たちは、その形、色合いから、藤の花を思い浮かべ、藤棚を作ったのです。そのアイデアには脱帽です。今年は、美しく一新された、立派な藤棚を御覧頂けると幸いです。制作に当たった御伽衆が、「御迎人形」とともに解説させていただきます。

紙からわかる宗因の人柄

八代市立博物館学芸員・鳥津 亮二

松尾芭蕉が「宗因がいなければ、今までの俳諧の流れは生まれなかった」と評した西山宗因（一六〇五～

諸で当時の文芸界のスターになったのである。

八二）は、近世初期の肥後が生んだ代表的文化人だ。二十九歳まで肥後八代で武士として暮らし、四十三歳からは大坂天満宮の連歌所宗匠として活躍。菅原道真没後七五〇年忌の万句連歌興行を成功させるなど、天満宮の連歌所復興に大きく貢献した。現在、天満宮大門の傍らにある『西山宗因向榮庵跡』の石碑は、宗因がここに居住していたことを示している。

ところで、その宗因はどんなお人柄だったのか。結論を言うと、私は「驕らず、謙虚で優しい人柄」だったと考えている。そのことは現存する宗因の作品から垣間見ることができるのだ。

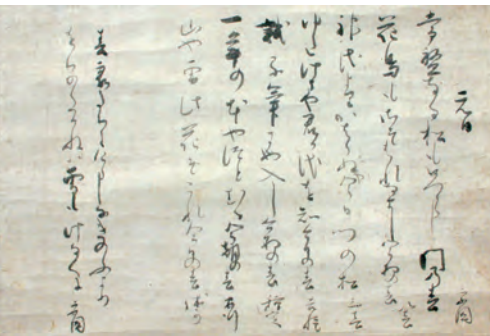
例えば、①は宗因が大坂天満宮の神主たちと元旦に詠んだ連歌発句と和歌を書いた懐紙である。注目すべきは紙だ。これは宗因が自分の手控え用に書いたもので、使われているのは質素な白紙である。天満宮に伝来している宗因手控えの連歌書も、ほとんどはこうした質素な紙だ。

一方、②は宗因がある人に贈った自筆色紙である。句は「竹の子はうぶよりふし見そだちかな」という、伏見の人にタケノコをもらった喜びを軽妙に詠んだ俳諧句。しかも紙を

よく見ると、金泥でタケノコが描かれていることに気づく。つまり、宗因はこの句を書くために、タケノコを描いた紙をわざわざオーダーメードしたのである。これを贈られた人はとても喜んだだろう。

当時一世を風靡していた宗因は、いろんな人から作品を所望されることが多かった。しかし、多忙にもかかわらず、相手を喜ばせるために一点一点心を尽くして句意に合わせて紙を選び抜き、コーディネートする。「大坂天満の梅翁」はそんな謙虚で心優しい人だった。若き日の西鶴や芭蕉が宗因に憧れたのは、その比類なき俳諧センスのみならず、こうした温かい人柄に魅かれた部分も大きい。

宗因は俳諧師としても「談林派」といわれる新風をおこし、軽妙・斬新な作風で人気を博した。天満宮西側脇門そばの句碑に刻まれた「浪華津に さく夜の雨や 花の春」（本歌は新古今集の序）、境内の白米稲荷の一角にある句碑の「ながむとて花にもいたし 首の骨」（本歌は新古今集の西行の一首）は、古典和歌を軽妙に詠み替えた宗因俳諧の代表句だ。「大坂天満の梅翁（宗因の俳号）」はこうしたセンスあふれる俳



↑①歳旦和歌懐紙 宗因自筆 八代市立博物館所蔵



↓②「竹の子は」句色紙 宗因自筆 八代市・正教寺所蔵

かったに違いない。

※西山宗因を紹介する展覧会が熊本で開催されます。

特別展覧会「華麗なる西山宗因」

会期

七月十六日（金）～八月二十二日（日）
毎週月曜日休館（祝日の場合は翌日）
観覧料

一般 三〇〇円 高大生 二〇〇円
中学生以下無料

会場

八代市立博物館
未来の森ミュージアム
熊本県八代市西松江城町一二―三五
電話〇九六五―三四―五五五五

天神祭実行委員長

京極俊明氏 叙勲



天神祭実行委員長である京極俊明氏が、今春の叙勲において、大阪府議会議員として永年にわたり地方自治へご尽力されたご功績により、畏き思いから「旭日中綬章（きよくじつちゅうじゅしょう）」に叙せられました。

「旭日章」とは、明治八年に制定された我が国最初の勲章であり、図様の国旗「日の丸」を象徴する日章を中心に、光線を配した旭光デザインは、「旭日昇天の意気を示すもの」を意味します。

受章にあたり京極氏は「今回のこの栄誉は、単に私個人に与えられたものではないことを充分に認識し、一〇期に亘る大阪府議会議員時代をはじめ、これまで永年温かく力強くお支え下さった多くの方々のお陰であることを肝に銘じ、改めて感謝の念を新たにしつつ、更に一層精進を

致さねばならぬ所存でおります。」と述べておられます。

京極氏は、昭和四四年一月より大阪府議会議員として府政に参画され、北区をはじめ地域の活性化に惜しめない努力を注いでこられました。また、当宮および天神祭との関わりも古く、昭和五九年九月には「大阪天満宮講社連合会」相談役に就任。



平成九年には「天神祭実行委員長（総奉行）」にご就任され、以来今日に至るまで、氏子や講社の皆様方の中心的存在として年々の天神祭にご奉仕戴いております。

現在、議員ご勇退後も大阪府常勤監査委員として府政の要職にお就き

寺井種伯宮司

三つの慶事

本年は、当宮寺井種伯宮司にとりまして三つの節目が重なりました。

昭和八年生まれの宮司は、昭和三四年に明治神宮を経て当宮に奉職し、平成元年に宮司に就任しました。そのため、今年は「御神勤五〇年」「宮司就任二〇年」「喜寿」という三つの慶事が重なったのです。

そこで、当宮の「総代会」と「講社連合会」と「職員一同」が連名で祝賀の会を企画し、去る五月十七日、天満宮会館「孔雀の間」において開催致しました。

祝賀会の冒頭、天神祭実行委員長



京極俊明氏の祝辞

の京極俊明氏から代表祝辞を頂戴し、上方落語協会の桂春之輔幹事長から花束が贈呈されました。その後、宮司の謝辞を経て、京極俊明氏・勢山孝藏氏・宗石剛氏・瓜生田為次氏・寺井宮司による「鏡開き」、続いて、講社連合会会長の宗石剛氏の乾杯の音頭で歓談に移りました。

その間、上方落語協会の桂三枝会長もお祝いに駆けつけられ、一層、和やかな雰囲気を出演頂きました。最後に、氏子総代の上野誠三郎氏による閉会の辞があり、太鼓中総代の島田学氏の大坂締めでお開きとなりました。



鏡開き

上方落語の定席「天満天神繁昌亭」では、毎月二五日の夜席に「天神寄席」と銘打った落語会が開催されています。当宮がその隣接地を繁昌亭に提供していることへの謝意として開かれているものですが、去る五月二五日には、桂三枝師匠の



天満天神繁昌亭でも宮司の祝賀落語会



桂三枝師匠の祝辞

発案で、寺井宮司の慶事を祝賀する「天神寄席」として開催されました。

立ち席の当日券まで売り出されるほどの大入り満員のなか、高座では、林家笑丸・桂米二・林家染丸・桂三枝師匠による落語四席と桂春之輔師匠と寺井宮司の対談が行われました。

かつて上方落語協会が当宮と折衝して繁昌亭の建設を決めたとき、三枝師匠は上方落語協会会長、春之輔・染丸師匠は副会長でしたから、その三名を揃えたことにも三枝会長の思いが込められていたようです。



桂春之輔師匠と宮司の対談

はじめての史料集

『大阪天満宮 天神祭と流鏝馬式史料(近代一)』

夏大祭 秋大祭 慶応元年〜明治二十年 発行

本年三月二十五日、当宮に伝わる「大阪天満宮所蔵古文書」をもとに当宮としてはじめての史料集『大阪天満宮 天神祭と流鏝馬式史料(近代一)』(慶応元年〜明治二十年)が発行されました。

本書では、明治元年からではなく、少し溯って慶応元年から史料を採録しています。天神祭船渡御が慶応元年から休止となり、明治四年に至って復活するからです。

天神祭と流鏝馬式史料の他に、明治初年に戎島(梅本町・現西区川口一丁目)から松島(現西区千代崎一丁目)へ御旅所が転宮したため、御旅所転宮関連史料も採録しています。戎島御旅所のすぐ北側に川口居留



なお、本書の編者近江晴子当宮文化研究所研究員が、平成十七年より本年三月末まで関西大学にわ・大阪文化遺産学研究センター研究員を兼務しており、本書は、同センターと当宮から同時に出版されました。

今後は、当宮から同史料集(近代二)・(近代三)を発行して参る予定です。

新刊紹介

『太子信仰と天神信仰』

―信仰と表現の位相―

平成一四年から当宮文華館において開催してきました「太子信仰と天神信仰研究会」の成果が、このたび標記の書名で、思文閣出版から刊行されました。

同研究会は、「平成一四〜一七年度科学研究費補助金」を受けて、文献史学から民俗学、美術史など幅広い研究者を集め、(太子も天神も、実在の人間として活躍した後に信仰の対象となった)という共通点に着目して比較研究を進めてまいりました。下記の通り一三名の論文を収載いたしました。本書により、天神信仰の新たな研究が進展することが期待されます。



武田佐知子「太子信仰と天神信仰―問題の所在―」。鶴崎裕雄「室町時代の紀行文に見る天神信仰・太子信仰―宗祇『筑紫道記』と三条西公条『吉野詣記』―」。高島幸次「太子信仰と天神信仰―真宗史の視点から―」。濱岡伸也「江戸時代の天神信仰・太子信仰と城下町金沢の文化」。下鶴隆「聖徳太子伝の史料性格―宗教的テキストの生成・流伝形態―」。松本真輔「拡散する聖徳太子伝承―近江に広がる聖徳太子寺院建立伝承と守屋合戦譚の展開―」。伊藤純「唐本御影の伝来過程をめぐって―背負わされた法隆寺での役割―」。榊原小葉子「地誌としての寛文刊本『聖徳太子伝記』―近世太子信仰の展開に関する一考察―」。稲城雅己「菅原道真の仏教的言説とその継承―『菅家文章』から『養父丞相廟願文』へ―」。脇田晴子「北野聖廟和歌・連歌とその功德―病氣平癒・諸願成就・連歌会所・短冊関を中心に―」。松浦清「正面向きで直立する異色の東帯天神画像について」。鈴木幸人「菅生天満宮所蔵・掛幅形式の天神縁起絵について」。竹居明男「越前国敦賀郡の天神信仰―序説―氣比神宮とその周辺―」。

三年目の天満HOPEゾーン

天満地区ゾーン協議会

会長 八十島義郎

五月二四日、天満宮梅香学院において、天満地区HOPEゾーン協議会の「第3回総会」を開催し、昨年度の報告と、新年度の活動方針について審議しました。昨年度は、次の三つの活動を行いました。

①天満のまちなみづくりの基本方針「まちなみガイドライン」の周知。

ガイドライン冊子の配付。天満宮文化研究所の近江先生による天神祭についての講話。さらに協議会からもガイドラインや修景事業についてご説明しました。

②天神祭・流鏝馬・菜花祭といった行事に合わせて、天神筋の沿道建物や華やかにする「幔幕(まんまく)」などの飾りつけ。これは江戸時代にみられた「しつらい(室礼)」の一種です。また、天満ならではの「しつらい」に関する資料を、文化研究所の高島先生のご協力を得てとりまとめました。



五月九日(日)、「日本酒正固め」が主催する「上方日本酒ワールド」が開催され、境内には十五のテントが立ち並び、日本酒と肴が振る舞われました。「日本酒正固め」のメンバーは、居酒屋など日本酒を扱うお店の店主の皆さんで、日本酒の需要拡大を目的として、これまで九回の行事を開催してこられました。今回は第十回の記念行事として企画されたものです。当日はまず酒造りの守護神である末社「松尾社」の前で開催奉告祭を斎行し、参加した十五の蔵元から各一品の日本酒が献じられま

③「大川浜検討会」への参画。大川浜の将来像について地域で検討するためのワークショップを開催しました。

このような協議会の活動と連携して、大阪市では、昨年七月末から「まちなみ修景補助制度」が開始されています。二月には天神筋において、当事業の趣旨にご賛同頂き、ビルの一階店舗部分の修景工事が行われました。天満らしい飾りつけを道行く人に見て頂く「しつらい空間」も設置しておりますので、ぜひ御覧下さい。

この後、一般参加者には参加証明となるガラス盃が五百円で頒布され、各テントには蔵元と居酒屋が一組となってお酒と肴が準備されました。午前中から大変な盛況で、終了時刻前にすべてのテントで肴が売り切れたほどの大盛況でした。延べ三六〇〇人以上の方が参加され境内は大混雑のため、泥酔者が出てはいけないとの配慮から、盃はかなり小さい一口サイズにするよう配慮したのですが、それでも何回もお替わりされる方もいらっしゃいました。

桂ざこばさん お孫さんのお宮参りに



去る五月八日、桂ざこばさんが、お孫さんの郁翔(いくと)君のお宮参りに付き添って来宮されました。ご両親である桂三若さんと真衣さん(まゐ)さんの(長女)も、当宮において挙式されていますので(平成二十年八月)、二度目の慶事による参拝となりました。郁翔君の晴姿に、皆さんも終始ご機嫌の様子でした。繁昌亭の開設により、近年は数多くの嘶家さんの参拝風景を見かけるようになりました。これからも今回のような慶ばしいニュースを期待したいですね。

平成天の川伝説 開催 「星愛七夕まつり」関連行事



天神祭・船渡

御の行われる大川は、その昔「天満川」と呼ばれていました。「天満」とは文字通り、星が天に満ちることを意味します。古代の人々は、月や星を水に映して眺め、願いを託しましたから、この天満川も天の川を映し愛でる場所だったので

す。この遺風を再現し、河川と水環境への感謝・思いやりの心をもつて頂こうと、「平成天の川伝説」を開催致しました。昨年は実験的に、「い

のり星」と名付けたLEDで光るボール二万個を、天満橋から中之島付近へ浮かべました。そして今年は、七月七日の夜、五万個もの「いのり星」を、先着二〇〇名の方々の願い事を込めて大川に流しました。

この行事が定着することにより、水の都大阪の新たな景観を創り出すとともに、上流水系への感謝の気持ちを育みたいと思います。また戦国時代以前の天神祭は、七夕に行われていましたから、その習俗を復活させるという意味合いも持ちます。

当日は、恒例となっています「星愛七夕まつり」とも連携して、相互に「いのり星」と「星愛七夕まつり短冊」が授与頒布され、当宮と大川一帯が、光の海、星の海となり、多くの参拝者がそれぞれの願いを込めて祈る姿が見られました。

人事任免

《総代委嘱》

平成二十二年二月二十五日付

株式会社 大水

真部 誠司

《退職》

平成二十二年三月三十一日付

参与 豊住 律人

巫女 向井 弘美

《新任》

平成二十二年四月一日付



巫女 大西 由里子



巫女 金住 晶子



巫女 野呂 奈未

大阪天満宮社報

てんまてんじん 第58号

平成22年7月20日印刷

平成22年7月25日発行

発行人 寺井種伯

発行所 大阪天満宮社務所

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-8

TEL 06-6353-0025

印刷所 木村印刷株式会社